

「イエス・キリストの平和—信頼への決断—」

弓矢健児（宣教と社会問題に関する委員会委員長）

「お前たちは、立ち返って静かにしているならば救われる。安らかに信頼していることにこそ力がある」（イザヤ書30章15節）

戦争は決して自然に始まるものではありません。戦争の背景には相手に対する敵意があり、不信感があります。その敵意や不信感をそのままにして、自分たちの安全を確保しようとするところに軍事力に頼る心が生まれ、結果的に戦争を引き起こします。

聖書が語るイエス・キリストの平和はそうではありません。イエスは「敵を愛し、自分を迫害する者のために祈りなさい」（マタイ5:44）とおっしゃいました。愛するということは、信頼するということでもあります。イエスは「敵」であると考えられる相手に対しても、勇気をもって信頼し、愛することを求められました。そのためにイエス自身がまず、神に敵対する私たち人間を十字架の死に至るまで愛し、信頼してくださいました。このイエスの愛と信頼によって、敵意という隔ての壁が壊され、イエス・キリストの平和が実現したのです（エフェソ2:15, 16）。

聖書が教えるイエス・キリストの平和の根底には、このような他者に対する愛と信頼があります。イエスが語る「平和を実現する人々」とは、まさに争いや暴力が絶えないこの世界の中で、敢えて相手を信頼することを決断し、他者との関係において和解の関係を育む人々のことではないでしょうか。

ナチスに抵抗した牧師：ボンヘッファーはある講演で次のように語っています。「安全の道を通して平和に至る道は存在しない。なぜならば、平和は敢えてなされねばならないことであり、一つの偉大な冒険であるからだ。それは決して安全保障の道ではない。平和は安全保障の反対である。安全を求めるとことは〔相手に対する〕不信感を抱いているということだ。そして、この不信感が、再び戦争をひきおこすのだ。安全を求めるとことは、自分自身を守りたいということである。平和とは、全く神の戒めにすべてをゆだねて、安全を求めないということであり、信仰と服従とにおいて、諸民族の歴史を、全能の神のみ手の中におくことであり、自分を中心とする考え方によって諸民族の運命を左右しようとは思わないことなのだ。」（『教会と諸民族の世界』『告白教会と世界教会』（139頁））。

ボンヘッファーが語っているように、安全保障という考えの根底には相手に対する不信感が前提としてあります。そのために他国よりも強い軍事力を求める誘因が絶えず働き、それが核兵器に依存する世界を造りだしています。日本はナガサキ、ヒロシ

マの悲劇を経験した唯一の被爆国でありながら、米国の「核の傘」に依存し、「核兵器禁止条約の締結」に反対しています。その姿は、平和への決断ができず、不信感の連鎖の中に閉じこもろうとする現実を表しています。しかし、世界が不信のサイクルに留まる限り、行きつく先は核戦争の悲劇です。

神はイエス・キリストの「十字架の血によって平和を打ち立て、地にあるものであれ、天にあるものであれ、万物をただ御子によって、御自分と和解させられました」(コリ1:20)。神は決してこの世界が核戦争によって滅びることを望んではおられません。それ故、教会とキリスト者は、キリストの平和によって神が万物と和解してくださったという現実にも堅く立って、キリストの平和の進展のために仕え、平和を実現する者として奉仕する使命があります。それは相手への不信を前提として軍事力による安全を追求する道ではありません。そうではなく、勇気をもって他者への信頼に生きる道です。なぜなら、神を信頼し、他者を信頼して生きる中にこそ真の力があり、それが平和を実現していく力となるからです。

2016年「長崎平和宣言」の中に次のような記述があります。
「核兵器の歴史は、不信感の歴史です。国同士の不信の中で、より威力のある、より遠くに飛ぶ核兵器が開発されてきました。世界には未だに1万5千発以上の核兵器が存在し、戦争、事故、テロなどにより、使われる危険が続いています。この流れを断ち切り、不信のサイクルを信頼のサイクルに転換するためにできることのひとつは、粘り強く信頼を生み続けることです。我が国は日本国憲法の平和の理念に基づき、人道支援など、世界に貢献することで信頼を広げようと努力してきました。ふたたび戦争をしないために、平和国家としての道をこれからも歩み続けなければなりません。」

一般恩恵である日本国憲法の平和主義の理念と、特別恩恵である「キリストの平和」とはもちろん同じではありません。しかし、「平和を愛する諸国民の公正と信義に信頼して、われらの安全と生存を保持しようと決意した」と述べる日本国憲法前文と憲法第九条の平和主義の理念は、他者への信頼に生きるよう求める聖書的平和・「キリストの平和」の教えに適うものです。

「平和の福音に生きる教会は、思想・信条・宗教の違いを超えてすべての人を尊び、この世における正義と平和の実現のために彼らと共に働き、自ら進んで良き隣人となって世に仕える。また、暴力的な支配や戦争、平和に生きる権利と良心の自由とを侵害する国家的干渉に対しては、主の御心を大胆に宣言して否と言う。」(日本キリスト改革派教会創立70周年記念宣言「福音に生きる教会」より)。

「旧日本への回帰と平和憲法の危機」（70周年宣言序文）が強くなっている社会の中で、教会は信頼を育み、平和を実現する者としての責任を改めて問われています。